

## 資料 一 年表・英国のレトリック

有 沢 俊 太 郎

### I 資料作成の動機

本資料は中世末期から19世紀初頭に至る約400年の間に英国において刊行されたレトリックに関する文献を年表の形式に整理したものである。この作業のために使用した書物は、

Howell, W. S : Logic and Rhetoric in England, 1500 - 1700 (Princeton Univ. Press, 1956)

Howell, W. S : Eighteenth-Century British Logic and Rhetoric (Princeton U.P, 1971)

の二冊である。

西洋のレトリックが明治期のわが国の国語・国語教育界に深い関係をもっていることは周知の事実である。日本人の西洋のレトリックとのつき合いは、すでに明治10年代から始まっている。尾崎行雄、菊地大麓、高良二、黒岩大らは、その代表的な人物である。彼らは、維新の後本格的に接することになった西洋のレトリックに、これからの日本人の言語生活に必要な欠くべからざるものを認め、それを積極的に吸収・消化しようとした。たとえば、涙香黒岩大は次のように述べている。

西洋諸国ニ於テハ既ニ語辞ヲ修スルノ学課アリ然ルニ我国ニ於テハ之ヲアルヲ見ズ豈ニ盛時、欠点ニ非ラスヤ（『雄弁美辞法』緒言明15年）

「語辞ヲ修スル」意識それ自体は、古代日本人にも芽生えていた。また後に中国の修辞学との接触があり、また西洋のレトリックは、断片的ではあるが、キリシタン資料の中にも見出される。しかしここで重要なことは、黒岩が「学課」ということばを用いて、レトリックを教育と不可分のものとしてとらえているところにある。これは、彼が西洋の（彼のばあいはアメリカの）レトリックに備わっている体系性、方法性に注目していたことを示すものである。伝統的に文章・文体の研究が「注釈」によって発達してきたわが国において、彼の着目はまさに以後の文章・文体研究に示唆を与えると同時に、その成果を教育の場に適用していくための条件でもあった。明治中期以降の修辞学書が、文章・文体の見方、扱い方について、まるで指導書のように説いているのも理由のないことではないのである。

ところで、明治期に受容された西洋のレトリックのほとんどは、英国、アメリカのものである。とりわけ英国のレトリックは、菊地大麓のチェンバース百科事典の翻訳、高良二のブレア抄訳以来、日本人が上記のような西洋のレトリックの性格をとらえる際に中心的な役割を果たしてきた。とりわけ英国18世紀、19世紀のレトリックは、明治のわが国に直接関係するのである。Camp-

bell, G, Blair, H, Whately, R …… の名前は大きい。そして彼らの文体・文章に対する態度は「注釈」に終始していないのはもちろんのこと、ことばのあやの分類を好むわけでもない。この意味では、彼らは確かにいわゆる New Rhetoric (この性格については後に触れる) の流れに属している。しかし反面彼らの論調は全く異なるばあいがある。たとえば, Blair が nature に彼独特の概念を与え, そこから彼の修辞理論を構築しているのに, 他の二人には全くこのような態度がみられないこと。あるいは Wately の understanding と will の区別が, 逆に Blair では nature の内部につつまこまれていること, などである。なぜこのようなことが発生するのか。これは, 筆者の個性が伝統に対して働きかけ, その結果が様々な立場の相違となって現れているからであろう。レトリックはギリシャ・ローマ以来の伝統を背負っている。これをすべて通覧することは不可能であろうが, 少なくとも当該の18・19世紀の書物を他から切り離して対象とすることは避けねばならない。大きな流れの中でその位置を確かめる必要があると思うのである。年表の作成は, 以上のような動機から行った。次に作成の要領を述べる。

## II 年表作成の要領

1. 表は, 左から年代, 著者・翻訳者名, 書名・翻訳者名, 分類記号を示す。
2. 著者・翻訳者名欄の ( — ) は, 無著名により不明, ( tr ) は翻訳者であることを示す。
3. 分類欄の ( ) は, 外国書である。追って英訳本が刊行されて, 英国のレトリックに関係の深いものを掲載した。また ( — ) は, 百科事典などのために分類不可能なものである。
4. 分類記号として, アルファベット ( A ~ D ) と数字 ( 1 ~ 3 ) を用いた。次に分類の基準を示し ( 4・1 ), それぞれの性格を概観しておく ( 4・2 )。

### 4・1 分類の基準

A	Traditional Rhetoric	{	(1) Ciceronian Rhetoric	ギリシャ・ローマのレトリックの伝統をうけつぐ
			(2) Stylistic Rhetoric	
			(3) Formulary Rhetoric	
B	Reformative Rhetoric	{	(1) Ramist	A に対する改革
			(2) Neo - Ciceronians	
C	New Rhetoric			A, B の結果として発生
D	Elocutionary Movement			英国独特のレトリック

### 4・2 各領域の性格

A (1) 5 種類の操作 ( invention, arrangement, style, memory, delivery ) がすべて (ほとんど) 含まれたレトリック。

invention は根拠に信憑性を与えるために妥当な argument を発見することである。

arrangement は, このようにして発見された argument を適切な順序に並べること。

expression ( style ) は, 発見されたことがらに適切なことばを与えていくことである。

memory は, ことばとことがらをしっかりと心に留めておくこと。delivery は話題や style

にふさわしい方法で、声や動作をコントロールすることである。( Cicero, De Inventione, 1.7.9, trans. H. M. Hubell, The Loeb classical Library. PP. 19~21)

A (2) 5種類の操作すべてにかかわるのであるが、style 論が重い。

Stylistic Rhetoric は二つの主な特徴をもっている。第一に、そこでは、コミュニケーションの訓練には最も重要な部門だとして、はっきりと style について言及されている。しかし他方では invention, arrangement ……もレトリックの正統的な分野であることがはっきり意識されている。( Howell, 1956, P. 116 )

A (3) 5種類の操作を円滑に行うための実例集

Formulary Rhetoric は、レトリックの原理を説明するのに引かれる文章、あるいは、学生が自己を発展させる過程において模倣すべき(モデル)から成り立っている。(Howell, 1956 P. 138)

B (1) フランスのレトリックの影響

Ramus, P は、論理学が invention と arrangement の訓練を受け持つべきであり、そこにレトリックの助けは必要としないということを決めた。(略) 彼は、レトリックは style と delivery の訓練を受け持つべきであり、style はことばのあやや組み立て方に限定されるべきであって、文法の助けは必要ではない、と決めた。文法は単に語源やシンタクスの考察に関することを扱うべきである。(略) memory は Ramus によってレトリックから分離された。(Howell, 1956, PP. 147 ~ 148)

B (2) Aとの折衷

修辞技法の手引き、指導書。ここでは oration の形成と分析が教えられる。すなわち技法的に oration を組み立てること。明確な方法でそれを分析すること。三版(1628年)では、学校で使うことを考慮して、後者に比重がかかる。著者は Thomas Vicars, John Owen。レトリックは手のひらのようなものであり、dialectic はこぶしである。dialectic は戦を行う。しかし手のひらは勝つ。(Vicars, T 1621の序文)

C New Rhetoric であるための6つの条件

- ① レトリックの対象を、政治的儀式的なスピーチに限定せず、学術的教育的論説や詩にまで広げる。
- ② 立証(proof)は、仮説ではなく事実(the fact of case)に立脚する。
- ③ 立証の方法は、三段論法ではなく帰納的な性格をもつ。
- ④ レトリックは、物事の蓋然性(probability)だけを扱うのみでなく、responsibility(確実性)をも扱う。ことばと事実との対応が精密になったり近似的な程度にとどまることに気づいていたので、真理の探究はことばによる理由づけ(人間の事実に対する判断によってもたらされる)による。
- ⑤ 5つの分野を順守していることへの疑問。機能的視野からの分野の設定。
- ⑥ 装飾的な style への疑問。plain style への指向

(Howell, 1971, pp. 441 ~ 447 を要約した。)

### D 発音, アクセント, 文彩, 所作への興味

実際は Cicero の 5 番目の分野 (delivery) から生まれたものであるが, 英国においては第 3 の elocution を含んで発達した。このような性格は Chambers, E の Cyclopaedia 2 版 (1738年) にみられる。(Howell, 1971, pp. 145 ~ 149 を要約した。)

### Ⅲ 年 表

1479	Traversagni, L. G.	: Nova Rhetorica	A1
1481	Caxton, William	: Caxton's Mirroure (2nd ed. 1490, 1527)	A1
1481	—————	: The Court of Sapience	A2
1509	Hawes, Stephen	: Pastime of Pleasure	A1
1521	Melanchton, Philipp	: Institutiones Rhetoricae	(A1)
1530(?)	Cox, Leonard	: The Arte or Crafte of Rhethoryke (2nd ed. 1532)	A1
1533	Udall, Nicholas	: Flovers for Latine Spekyng Selected and gathered oute of Terence and the same translated in to Englysshe	A3
1539	Taverner, Rychard	: The garden of wysdom	A3
1539	Taverner, R.	: The secōde booke of Garden of wysdome	A3
1539	Taverner, R.	: Proverbs or adagies with newe addicions gathered out of the Chiliades of Erasmus	A3
1540	Taverner, R.	: Flores aliquot sententiarum ex variis collecti scriptoribus (also called, The Flowres of sencies gathered out of sundry wryters by Erasmus in Latine and Englished by Rychard Taverner)	A3
1540	Susenbrotus, Joannes	: Epitome troporum ac schematum et grammaticorum et rhetoricorum	A2
1542	Udall, N. (tr)	: Erasmus's Apophthegmes	A3
1544	Talon, Omer (Talaeus)	: Institutiones Oratoriae	(B1)
1548	Jewel, John	: Oratio contra Rhetoricam	A2
1550	Sherry, Richard	: Treatise of Schemes and Tropes	A2
1553	Wilson, Thomas	: The Arte of Rhetorique (1560, 1562 <sup>3</sup> , 1563 <sup>4</sup> , 1567 <sup>5</sup> , 1580, 1584, 1585)	A1
1555	Foelin	: Rhetorique Francoise (Talon 1544, French Version)	(B1)
1555	Ramus, Peter	: Dialectique (1556, 1576)	(B1)
1563	Rainolde, Richard	: A Booke called the Foundacion of Rhetorike	A3
1568	Fullwood, William	: The Enemie of Idlenesse	A3
1576	Sturm, John	: De universa ratione elocutionis rhetoricae	B1
1577	Harvey, Gabriel	: Ciceronianus	B1
1577	Harvey, G.	: Rhetor	B1
1577	Peachman, Henry	: The Garden of Eloquence Conteyning the Figures of Grammar and Rhetorick (1593)	A2
1577	Ludham, John (tr)	: The Practise of preaching, Otherwise Called the Pathway to the Pulpet; Conteyning an excellent Method how to frame Divine Sermons	A2
1584	Fenner, Dudley	: The Arte of Logike and Rethorike (1588 <sup>2</sup> )	B1
1586	Webbe, William	: Discourse of English Poetrie	B1
1586		: Talaeus's (Talon's) Retorike (Talon 1544, English Version)	B1
1586	Day, Angel	: The English Secretorie (1635 <sup>9</sup> )	A2, 3
1588	Kempe, William	: The Education of children in Learning	B1
1588	Fraunce, Abraham	: Arcadian Rhetorike	B1
1589	Puttenham, George	: The Arte of English Poesie	A2, B2

1592	Copland, Robert	: The Art of Memory, that other wyse is called the "Phenix"	A1
1593	Mundy, Anthony	: The Defence of Contraries	A3
1595	Sidney, Sir Philip	: An Apology of Poetry, or the Defence of Poesy	B1
1596	Piot, Lazaus	: The Orator	A3
1597	Butler, Charles	: Rameae Rhetoricae Libri Dvo	B1
1599	Hoskins, John	: Directions for speech and style	B1
1605	Bacon, Francis	: The Advancement of Learning	C
1612	Brinsley, John	: Lvdvs Literarivs : or, The Grammar Schoole	B1
1617	Robinson, Robert	: The Art of Pronunciation	D
1621	Hart, Andrew	: Avdomari Talaei Rhetorica	B1
1621	Vicars, Thomas	: Manuduction to the Rhetorical Art ( 1628 <sup>3</sup> )	B2
1625	Farnaby, Thomas	: Index Rhetoricus ( 1713 <sup>13</sup> )	A3, B2
1628	Clark, John	: Transitionum rhetoricarum formulae, in usum scholarum	A3
1629	Clark, J.	: Formvlue Oratoriae ( 1673 <sup>11</sup> )	A3
1629	Butler, C.	: Oratoriae Libri Duo	B1, 2
1633	Pemble, William	: Enchiridion Oratorivm ( Orational Manual )	B2
1634	Barton, John	: The Art of Rhetorick Concisely and Compleatly Handled	B1
1641	Horne, Thomas	: sive Manuductio in Aedem Palladis	A3
1646	Wilkins, John	: Ecclesiastes, or, A Discourse concerning the Gift of Preaching As it fals under the Rules of Art ( 1693 <sup>7</sup> )	C · D
1648	Farnaby, T.	: Troposchematologia ( 1767 <sup>15</sup> )	A2
1650	Prideaux, John	: Hypomnemata	B2
1651	Dugard, William	: Rhetorices Elementa ( 1657 <sup>5</sup> )	B1
1651	Horne, Thomas	: Rhetoricae Compendium, Latino – Anglice	B1
1651	Hobbes, Thomas	: A Briefe of the Art of Rhetorique	C
1651	Wilkins, J.	: A Discourse Concerning the Gift of Prayer	C
1654	Blount, Thomas	: Academie of Eloquence	A2, B2
1657	Smith, John	: Mysterie of Rhetorique Unvail'd ( 1683, 1688 )	B1
1657	Radau, Michael	: Orator Extemporaneus	B2
1657		: Talaeus's Rhetorica ( Talon, 1544 English Version )	B1
1659	Hoole, Charles	: A New Discovery of the old Art of Teaching Schoole	B1
1659	Walker, Obadiah	: Some Instructions concerning the Art of Oratory ( 1682 <sup>2</sup> )	B2, B1
1659	Prideaux, W.	: Sacred Eloquence	B2
1661	Boyle, Robert	: Some Considerations Touching the Style of the H. Scriptures	C
1667	Sprat, Thomas	: The History of the Royal-Society of London, For the Improving of Natural Knowledge	C
1668	Wilkins, J.	: An Essay Toward a Real Character, And a Philosophical Language	C
1669	Holder, William	: Element of Speech	D
1671	Newton, John	: An Introduction to the Art of Rhetorick	B2, B1
1673	Walker, O.	: Of Education Especially of Young Gentleman	B2
1675	Lamy, Bernard	: La Rhétorique, ou l'art de Parler ( 1688 <sup>3</sup> )	( C )
1676	—————	: The Art of Speaking ( English Version of Lamy 1675; 1696, 1708 )	C
1678	Glanvill, Joseph	: An Essay Concerning Preaching : Written for the Direction of A Young Divine ; and Useful also for the People, in order to Profitable Hearing	C
1678	Glanvill, J.	: A Seasonable Defence of Preaching	C
1681	Fenner & Hobbes, T.	: English Version of Talon 1544	B1
1690	Locke, John	: An Essay concerning Humane Understanding ( Chap. X of Book III – Of the Abuse	

		of Word )	C
1702	Burton, Nicholas	: Figurae Grammaticae & Rhetoricae	A2
1706	Kennet, B., Rymer, T. & Taylor, T. ( tr )	: The Whole Critical Works of Monsieur Rapin, In Two Volumes . . . . . Newly Translated into English by several Hands ( Translated Version of Rapin & René )	C
1715	—————	: Some Rules for Speaking and Action : To be observed at the Bar, in the Pulpit, and the Senate, and by every one that Speaks in Publick. In a Letter to a Friend ( Pamphet )	D
1717	Fénelon	: Dialogues sur L'Eloquence	( C )
1720	Ward, John	: A System of Oratory, Delivered in a Course of Lectures Publicly read at Gresham College, London : To which is prefixed An Inaugural Oratipn, Spoken in Latin, before the Commencement of the Lectures, according to the usual Custom ( 1759 <sup>2</sup> )	A1
1722	Stevenson, William ( tr )	: Dialogues Concerning Eloquence In General ( Translated Version of Fénelon ; 1717 )	C
1725	Henley, John	: The History and Advantages of divine Revelation, with the Honour, that is due to the Word of God ; especially in regard to the most Perfect Manner of delivering it, form'd on the antient Laws of Speaking and Action : Being an Essay to restore them ( 1727 <sup>2</sup> )	D
1726	Wood, William	: The Dueling Orator delineated	D
1727	————— ( tr )	: The Art of Speaking in Public : or an Essay on the Action of an Orator : As to his Pronunciation and Gesture ( English Version of Le Faucheur : Traitté de l'action de l'orateur, ou de la Pronunciation et du geste ) 1750 <sup>3</sup>	D
1728	Henley, J. ( tr )	: Oratory Transactions No. I ( English Verson of Le Faucheur )	D
1728	Chambers, Ephraim	: Cyclopaedia, 5 vols ( ~ 1729 ) 1738 <sup>2</sup> , 1750 <sup>6</sup>	
1733	Stirling, John	: System of Rhetoric	A1
1734	————— ( tr )	: The Method of Teaching and Studying the Belles Lettres, or An Introduction to Languages, Poetry, Rhetoric, History, Moral Philosophy, Physicks etc ( English Version of Rollin & Chareles's Rhetoric )	C
1738	Henley, J.	: restorer of the ancient elocution	D
1739	Holmes, John	: The Art of Rhetoric Made Easy ( 1755 <sup>2</sup> )	A1
1742	Hume, David	: Of Eloquence	C
1748	Smith, Adam	: < a course of lectures on rhetoric in Edinburgh > ( ~ 49 )	C
1748	Mason, John	: An Essay on Elocution, or, Pronunciation ( 1787 <sup>5</sup> )	D
1750	Smith, A.	: < a course of lectures on rhetoric in Edinburgh > ( ~ 51 )	C
1751	Smith, A.	: < Lectures at Glasgow > ( ~ 1763 )	C
1753	Witherspoon, John	: Ecclesiastical Characteristics	C
1753	Dodsley, R. & J.	: An Essay on the Action Proper for the Pulpit	D
1756	Sheridan, Thomas	: British Education	D
1757	Sheridan, T.	: An Oration, Pronounced before a Numerous Body of the Nobility and Gentry ( 3rd edn )	D
1758	Lawson, John	: Lectures Concerning Oratory	C
1762	Sheridan, T.	: Course of Lectures on Elocution	D
1762	Burgh, James	: The Art of Speaking	D
1768	Witherspoon, J.	: < Lectures on Eloquence at Prinston >	C
1773	Herries, John	: The Elements of Speech	D
1774	Lawson, J.	: Lectures concerning Oratory, Delivered in Trinity College	C
1775	Herries, J.	: Analysis of A Course of Lectures on Speaking	D
1776	Campbell, George	: The Philosophy of Rhetoric	C
1777	Priestley, Joseph	: A Course of Lectures on Oratory and Criticism	C

1777	Walker, John	: Exercises for Improvement in Elocution	D
1780	Sheridan, T.	: General Dictionary of the English Language	D
1781	Walker, J.	: Element of Elocution. Being the Substance of a Course of Lectures on the Art of Reading; Delivered at several Colleges in the University of Oxford	D
1783	Blair, Hugh	: Lectures on Rhetoric and Belles Lettres (2 vols)	C
1788	—————	: The New Royal Encyclopaedia	—
1788	Chambers, E.	: Cyclopaedia; or, an universal Dictionary of Arts and Sciences (5 vols) ~ 1789	—
1797	Hall, W. Henry	: The New Encyclopaedia	—
1801	Walker, J.	: Rhetorical Grammar, or Course of Lessons in Elocution (3rd edn)	D
1806	Austin, Gilbert	: Chironomia; or a Treatise on Rhetorical Delivery	D

#### IV まとめと今後の課題

年表に掲載した修辞学書を、領域ごとに年代を区切って整理すると下の表が得られる。(外国書は対象としない。A・3・4のように複数の領域に関係する場合は、それぞれ数える。)

年代 \ 領域	A			B		C	D	
	1	2	3	1	2			
1451 ~ 1500	2	1	0	0	0	0	0	↓ The end of the Middle ages
1501 ~ 1550	2	3	6	0	0	0	0	
1551 ~ 1600	2	4	5	11	2	0	0	↓ The Renaissance
1601 ~ 1650	0	1	4	3	5	2	2	
1651 ~ 1700	0	1	0	8	6	9	1	↕ The Restoration
1701 ~ 1750	3	1	0	0	0	6	7	
1751 ~ 1800	0	0	0	0	0	8	10	↕ Classicism
1801 ~ 1850	0	0	0	0	0	0	2	
								↑ Romantic Period

A~Dの修辞学書は、数量的には右肩下がりに分布している。これは各領域のある時代における消長をうかがう一つの物差しになる。さらに領域の交替の理由は、Howellのように「社会的、政治的、学問的文脈から解釈」(1956, 序)される。そしてこの立場は、ある特定の書物の性格を検討するに当たっても、貫かれている。

確かにこのような背景的文脈からの解釈は、解釈の一方法である。しかし、このいわば外からの解釈だけでは不十分なばあいも多いのである。つまりこの方法では、各領域間の関係がレトリック固有の問題として押さえられないということである。たとえば、Howellの説明によって elocutionary movent が、英国の海外発展という18~19世紀の状況と密接に関連し合っていることは分かる。しかし、この運動がそれまでのレトリックの伝統とどのような関係を保って現れてきているか、という点についての説明は不十分ならざるをえない。もちろん形式的には、レト

リック A の一分野が切り離されたのであるが、elocution, delivery の内容は、B、C のレトリックによって問い直されていると考えられる。Howell はこの点についての言及がない。

レトリックどうしの内的な関連性を明らかにし、Howell の解釈を補うためには、結局この年表を利用して各領域における典型的な書物に直接当たっていくより方法はない。もちろんこの作業は明治の修辞学書の典拠となり材源となった英国の文献を意識して進めていくことになる。その際、ある英国書に現れる「注記」や「引用」には、明治の書物におけるそれらと同じくらいの注意が払われるべきであろう。